「節目を尊ぶ、人生は旅」

松榮山報

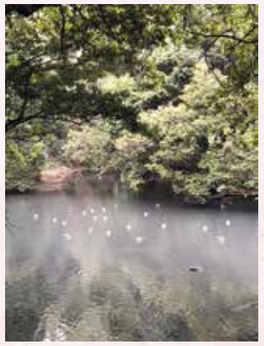
冬の護國神社
令和二年から令和三年

これからの祭典行事案内

厄割石　やくわりいし

本殿へと進む参道右手、小さな石畳を森へと進んだ先に厄割石があります。

この石は境内に流れる沢にあったものです。数十年前までは一の鳥居からこの百段階段に至る表参道の両脇に池がありました。きれいな湧き水が絶えることなく流れ、鯉が泳ぎ、池の周りには四季それぞれに花が咲き、それはまるで神社の森に抱かれているような神秘的な上段と下段のふたつの池でした。惜しいことに上段の池は土砂の流入によって埋もれてしまいました。



名残をとどめている下の池には、有り難いことに昔の姿をとどめ、今でも冬になるとカモが飛来し、ひと冬を越す姿が見ることができ、年々その数も増えていっているようです。そして池の上流には昔のままの渓谷があります。おそらく松栄山が生まれた太古の昔からこの渓谷の沢で長い年月を眠っていた石。御霊を祀る山となった今、時を経て神様が宿る厄割石として境内に鎮まっています。他の石とは異なる何やらの力をそなえているように感じた宮司以下神職一同。その場にて祝詞を奏上し、誰の手も借りずに神職のみで境内に奉りました。

人には生まれながらにそれぞれの役割があります。運命でもあります。この一年を見ても新型コロナウイルス感染拡大において、医療従事者の皆さんの昼夜を分かたず献身的に治療に励んでおられる姿に感銘を受けています。このようにさまざまな分野において社会的貢献をされる方もいれば、家族を守るために一生懸命に働いている人もいます。役割はさまざまです。

役割には負託に応えようと大きな責任や負担が伴います。自分自身、いつの間にやら疲れてしまうこと、行き詰まってしまうこともしばしばです。その時が個々の厄の時だとも言えます。厄とは決して厄年だけではなく、日常の些細な出来事のなかで生じる「意につまずくこと」でもあります。

護國神社のこの厄割石。毎日の暮らしのなかで、心ならずも起きてしまったさまざまなつらい思いや厄を割り、明日への活力へと変えて新たな「役割」へのチャレンジをしていただく。厄割＝役割に通じます。

厄割石のそばに「厄玉」を用意しております。手に取って祈りや思いを玉に込めて、厄割石に向けて投げて厄払いをしてください。

日本人は太古より一木一草一石に神様が宿っていると信じ、アメニズムを敬って暮らしてきています。その信仰心が精神（こころ）と日々の暮らしの大きな支えにもなっています。

護國神社の神苑から生まれ出た厄割石に、日本人の遥か祖先の思いを重ねながらご自身の厄を割ってみてはいかがでしょうか。

その時々が新たに生まれ変わる節目であると気づかされる石として、参拝の皆さんから崇敬されています。

令和3年4月9日 春季例大祭 斎行

現下を鑑み、祭典のあり方を慎重に判断してまいります。
宮司をはじめ奉仕神職、神社役員の出仕による祭典は従前どおり執り行います。
詳しくは改めてご報告とご案内をいたします。

これからの祭典行事案内

二月
- 紀元祭　十一日　午前九時から
- 祈年祭　十七日　午前九時から
- 天長祭　二十三日　午前九時から

三月
- 月次祭　一日　午前九時から
- 春季皇霊祭遥拝式、春分祭　二十日　午前九時から
- 骨董市　二十日・二十一日

四月
- 月次祭　一日　午前九時から
- 神武天皇祭遥拝式　三日　午前九時から
- 春季例大祭前夜祭　八日　午後七時から
- 春季例大祭　九日　午前十時三十分から

発行／令和３年２月10日
発行者／大分縣護國神社　発行責任者／八坂秀史
大分市大字牧1371　電話番号097－558－3096㈹

護國神社のホームページをリニューアルしました。
大分縣護國神社　検索
http://www.oita-gokoku.jp

丑年にあたり

大分縣護國神社宮司
八坂秀史

水牛の彫り物。小猫ほどだが黒檀製なのでズシリと重い。フィリピン慰霊祭に同行した折りに求めた。こうべは低く角で威嚇する姿に闘志は漲る。水牛は比国の今でも農業の働き手として重宝されている。そして我が国との複雑な歴史をもつ彼の国の国獣でもあり象徴だ。大東亜戦争時この地域では五十万人以上もの日本人が祖国に殉じられた。

三年前の慰霊祭は大分県縁故の戦跡五ヶ所をバスで巡った。標高千五百メートル高原の街バギオの《英霊追悼碑》には「此処に、われ等が恩讐を絶する日比両国の戦友百数十万の霊を慰むるため記念塔を立てる…愛情の最後の一滴を捧げつくして、侘しく滅びていった同胞の御霊よ……こころしずかに眠れよかし（抜粋）」とある。碑文とともに清らかな追悼碑周りにも胸が打たれた。日頃から住民が心を寄せている証しだ。

三日の間それぞれの祭場ではご遺族が肉親の御霊に祭文を口上した。兄弟を失い山中を逃げ惑った話、読経する人、名付け親の御霊に語りかける方、「お父さん！私は今幸せです」そうしぼり出す翁…。皆で捧げる「ふるさと」の歌声は途切れ途切れに。今や自分の年をはるかに超えた我が子たちのそんな思いの丈を聞きながら、御霊たちもさぞかし涙されたことと信じたい。

戦没者とご遺族の心を偲び結び合う……みたまなごめの基だと改めて銘肝した慰霊の旅だった。

年男を迎えた今年、黒光りの牛が言問う。その思いを忘れてないかと。

除災招福

令和三年

2000本のなかから見事一等煌賞のバカラのガラス製牛の置物を引き当てた市内の女の子

大分縣護國神社をはじめ、全国の神社では密集を避けるため分散参拝という前代未聞の今年の初詣のスタイルになりました。日ごろから護國神社に格別の思いを寄せていただいているご遺族崇敬者、ご近在の皆様には日にちを工面されたり、初詣をご遠慮になったりとやるせないことこの上なかったのではと思います。

今年は大昔から連綿と続いていた初詣の形が大きく変化しました。年の越し方や迎え方などその節目を尊ぶ日本人にとって、このようなことは日本の歴史上初めてであったかもしれません。お鎮まりの御霊たちもさぞかし御心を痛めておられたことと拝察する令和三年の幕開けとなりました。

静かに暮れて静かに明けた年末年始。もしかしたら昔の人が迎えていた新年もこうであったのかもしれません。神社で、また各家で静謐の中でただひたすら一心に祈りを捧げる。特に大晦日の晩から元旦にかかる大きな節目の数時間。深い闇の中に世の中の音という音、そして自分自身の心の清濁までもが吸い込まれ、夜の帷の中にある一木一草一石に至る自然や、そこにおわす神様と一体になっていくような言いようのない心の静まりと落ち着き。これが日本人の祈りの原点であったのかもしれません。

例年大変多くの参拝客で賑わっていた当たり前の風景が様変わりしてしまった今年。改めて「神様に祈る」「一生懸命に生きる」「当たり前」という根本的な姿勢を考えさせられた思いがしました。

難あって有り難し。今のこの大きな災難を逆手に取ると解釈して、すべての原点を見つめ直す機会を与えられたのかもしれません。人間は愚かではありません。きっとこの大難を乗り切ることができると信じています。そして私たちの国、日本は八百万の神様と国のために尊い命を捧げた数多くの御霊たちが守ってくださっています。災い転じて福となす、きっといつかそう思える日が訪れることを信じる。強い気持ちで今年のお正月に思いました。

穏やかなご社頭には頃合いを見計らって参拝されているご家族の姿がほとんどでした。ご友人やお仲間と合流してお参りくださっている例年のいつもの賑わいがなく、どなたも静かに神社での時を過ごしていました。分散参拝にご理解をいただき感謝いたします。

「コロナに負けないで」の思いを込めて、そして神様に喜んでいただき皆さんにご神威が届きますようにと、二目川神楽や鐵心太鼓の奉納、また書道パフォーマンスなどの神賑が、各団体のご理解とご協力によって例年どおり行われました。

手水舎にも新年をお祝いするかのようにおめでたい花手水がしつらわれて、新玉の年の初めに参拝される方々をお迎えしました。どちら様にも手水舎で、まさしく洗心の思いになっていただくような清々しい風景になりました。

祭典行事報告

御英靈のご遺志を継承するために

祭典行事報告

七五三

美しく着飾ったこの日が主役の子どもさんたち。よそ行き顔もさまになって、幼子からこうやって元気に成長をしていく過程を楽しく、そして頼もしくも見える人生の大切な行事のひとつです。初宮参りはお母さんやおばあちゃんの腕に抱かれて生まれて初めての神様へのご挨拶ですが、七五三は自ら歩み、そして拝礼ができるほどになり、ご家族の喜びがひしひしと伝わってきます。厳しい世の中ではありますが、どうか子どもたちがますます健やかにと祈りも深まる、特に今年の七五三でした。

菊花展

十月三十日～十一月十一日

護國神社の七五三の頃に毎年菊花展が催されます。大分市花卉同好会の皆さんが丹精込めて育てられた菊の花。気品と孤高さが漂う大輪の大菊や流れるような懸崖づくり、また見立てなどさまざまに工夫を凝らし努力されてこの季節を待ち、展示されている菊花は秋を寿ぎ妍を競うかのようでした。菊の花の香りは邪気を払うとされ、古くから重用されていました。世界中で猛威をふるっているコロナウイルス感染の中で、ご社頭に漂う、貴くそして神聖な香りは必ずや疫病退散の一助になるはずです。

大絵馬奉納

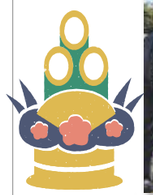
十二月一日

護國神社の年末行事のスタートが大絵馬の奉納です。毎年の干支を内田孝久氏に描いていただいています。二頭の牛のバックには護國神社に咲く豊後梅と朝日が描かれている今年の丑の大絵馬。毎年、この日の奉納除幕には大勢の方々が見物に来られて、まもなく訪れる年末年始への心の準備を整えられるようです。「今年はどんな絵なんだろう」、そんな期待が歓声に変わる除幕の風景です。今年も初詣に訪れた参拝者の思いが、御霊の鎮まる本殿の間近にあるこの大絵馬に託されたことでしょう。

大破魔矢、大熊手建ち上げ

十二月六日

大絵馬奉納に続いてご社頭にある高さ一八・八メートルの大破魔矢と一二メートルの大熊手の建ち上げが行われました。どちらも日本一の高さを誇る立派な厄除けの縁起物です。見上げれば天を突くような大破魔矢。地上で起こっているさまざまな禍事を、この大きな矢とともに空高く放ってもらいたい。またそれぞれの人たちの心からの願いや祈りが取りこぼすことなく大熊手で掻き寄せられますように。この行事では毎年お菓子まきを行っていましたが、今年は詰め放題のお菓子配布になりました。



祭典行事報告

御煤払式

十二月二十五日

神社の本殿をはじめ各所についてしまった一年の埃や煤を忌竹（いみたけ）で払う御煤払式。雨や風、台風など、近年の気象は非常に不安定で、尚且つ甚大な被害をもたらすことが増えてきています。こればかりは人間にはどうしようもできないことです。ただ自然環境を整えて、環境の破壊を食い止める努力がこれからは一層必要なはずです。年を重ねるたびにこの御煤払いでの塵や汚れが増えているようです。この日は朝から奉仕の皆さんによる大注連縄の奉製と掛け替え作業も行われました。

冬至大祓式 年越大祓式、火滅神事

十二月二十日
十二月三十一日

この日より日が長くなっていく冬至を一陽の嘉節とも言われています。令和二年、コロナウイルスによる災いは世界中に拡がり、人々を苦しめ、多くの企業、業種にまでその影響が今でも及んでいます。令和二年暮れの大祓式は二度の斎行と新たに忌火で災いを火滅する神事を執り行いました。半年間、一年間の悪しきことを夏は水で清め流し冬は浄火で滅する。水と火は私たちの命や暮らしの源。大きな節目のその日に心も体も元に還し、除災と新たな誓いを心に刻むお祭りです。

書初め

一月二日

昨秋から募集していた希望の一文字。応募約五百五十通の中から選ばれた文字は「明」でした。三十名近くの方がコロナ禍が明けるように、明るく過ごすことができるように、との思いが託されていました。不安な思いを吹き飛ばすような大変力強く若さあふれるパフォーマンスをしていただきました。今年で十年の節目になる大分高等学校書道部の皆さんによる護國神社での書初め。一気呵成に書き上げていく初春のご社頭を彩る書初めの様子に、初詣の参拝者から歓声が上がっていました。

七草粥

一月七日

笑顔あふれる年明け行事のひとつ七草粥。今年は残念なことに出来たてお粥を直接、その場で食べていただくことが叶えられませんでしたが、多くの方々にお持ち帰りいただいて、初春のお祝い事のおわかちができました。常とは異なる祭典や行事のあり方がこれからも続くかもしれませんが、護國神社は皆さんに常に寄り添う神社として、ご負担やご不自由をかけず、工夫をしながらお参りいただけるようにと念じています。難を逃れ、五体に早春の英気が行き届く七草粥のお振る舞いでした。

天まで届け「福は内、鬼は外、福は内」

百二十四年ぶりになる二月二日の節分。明治三十年以来のことです。珍しくも貴重な今年の節分祭。春の訪れを一日でも早くと、このコロナ禍に不思議なめぐりあわせを感じます。

今年は丑年。放牧場にいる穏やかで優しい牛の年になるのか、はたまた闘牛の牛のようにエネルギッシュな荒々しい年になるのか。

これまであまりに急ぎすぎた人間と社会のあり方。世界がボーダーレスであることがすべてフリー、個人主義と自由が当然であるかのような昨今でした。そして何もかもの動きを、さらに……、もっと速くにという人々の飽くなき求め。残念なことにこの一年で、思いもかけない疫病が世界中に拡大されていることも、何事にもスピードに優劣をつけていた人間の生き方や暮らしのありのままの結果と大きすぎる責任かもしれません。世界全体や身近な社会の仕組みが大きく変わりつつある渦中にあって、子年であった昨年と今年の干支丑年の方々にとっては、終生忘れることのできないご自身の年周りであることと思います。今年でもってこの災いを断ち切らねばならない努力を、すべての人類がせねばならない転換期かと思います。

節分祭は新たな年の幕開けと暦の上では春。芳春を感じるお祝い。春そして十二年目に巡りきたご自身の干支、年男・年女になられた方たちの節目を祝い、併せて厄除けの行事です。

コロナ禍の中ではありましたが、今年も古式に則った袴姿も凛としている年男年女の方々九名を主役に、春を告げる護國神社の清々しいお祭りに多くの人々で賑わいました。

長い人生のうちで幾度も訪れることのないご自身の干支。大切な人生のお祭りのひとつでもあります。一度、天高く神様に届けとばかりに豆打ちされたご利益のある豆を皆さんが共に授かる。それはまさしく神様からの有り難いお下がりを頂くこと。早春らしい穏やかな様子は人神一体になるような嬉しい節分祭です。

「福は内、鬼は外、福は内」。今年が年男である宮司が、大神様と参拝者の前で豆打ちに込めた思いはひとつ。

「このコロナ禍が一日も早く収束するように。そしてどの方もひたすら無病息災でありますように」

この日、宮司をはじめ年男年女の方々が放った幾千幾万の数の福豆。その一粒一粒のパワーとご利益がご参加のそれぞれの人々の元に届き、どうかご安全にお過ごしいただけたらと神職こぞって深く深く願いました。

草をゆっくりと食む牛のように、田畑を耕す大きな労力となっていた昔の牛のように、勇猛果敢な闘い牛のように、そして人々の命を助けてくれる牛のように。このコロナ禍の時にやって来てくれた頼もしい丑年に託す思いが多くあります。

今年の年末にはさまざまな禍事が牛の大きな背に乗せられて、すべてが安堵して終わることを念じるばかりです。人も牛も元気にお働きの一年になりますように。

翌三日は立春でした。どうか穏やかで、健康で、そしてコロナウイルスの収束が目に見えて進みますように。

山歩紀（やまあるき）

～山に思う～

「鎮南山（ちんなんざん）」

宮司　八坂秀史

臼杵城址からの鎮南山

山名はその昔この山が臼杵の街の南を鎮めるとされ名付けられた。去る一月中旬、五三六メートルのその頂きを目指した。午前十時高速道路近くの駐車場は既に満車、毎日登る猛者もいるようだが今日は殊の外多いのだろう。春のような暖かさのなか今年の山歩きの第一歩を踏み出す。

明るい杉木立の中、しっかり整備された登山道に一合ごとの標識と目印テープで道に迷うことはない。四合目「リトル鎮南山」で臼杵の街並みを眺めて五合目に至る。かたわらの桜並木と記された板には臼杵出身の故首藤定氏による記念植樹とある。昭和十年頃の話なので樹種によっては枯れていてもおかしくはない。確かに登山道沿いには老木が散見される。同氏は元大連市商工会会頭、戦後私財を以て食糧を求め邦人を救った方だ。私の母も首藤氏に救われた一人。父の戦死後ソ連兵に怯えながら大連で帰国を待つ中、どこからかトウモロコシの粒がほどこされる。後になって首藤氏の助けと分かり今でもそのご恩を母は忘れていない。枯れた木に触れ私も感謝の念を抱く。お陰で母は命をつなぎ私が今ここにいる。樹々が朽ち果ててもこの説明書きは残してほしい、桜とそんな時代があったことが伝わるように。

かつては鳥居が建っていた八合目を越すと勾配がグッと増す。九合目を経て標高四七五メートルの塔ノ尾に至る。ここに祀られている石鎚神社に悪疫退散を祈り、石祠が向いている豊後水道のはるか先四国の霊峰石鎚山に思いを馳せた。垂直の鎖場と絶壁の尾根を越えてたどり着いた西日本最高峰（一九八二M）の峻厳な岩峰を回想していると、その峰を崇める石鎚神社のT宮司から連絡がきたではないか！。神社新報の先輩の投稿読みましたよと。こちらは実は今こうなのだと伝えたが二人して石鎚大神のおぼし召しに鳥肌が立った次第。稀有なことはさらに家内にも及んだ。後から上がってきた家族連れの少年が「あの～三佐のやさか神社のひとですよね」「ぼく春のお祭りにはいつも出てます」と。汗だくで仰天する家内に「山の中でも女性神職の立振舞い忘るることなかれ」とエラソーに諭す私だった。しかし汗みどろの山ガール？が、年一回お祭りで見かけるしゃなり神主さんだとよくぞ気付いた、氏子少年ありがたや（おそろしや）。山はこの日私たちに新春のサプライズを用意してくれたのだな。

ではお先にと六〇〇メートル先の頂上に向かうが大きな爆発音が続けて聞こえてくる。多分石灰石を採る発破音だろう。ゆるやかな山道を登り麓から一時間五五分後、鎮南山頂上に着く。津久見鉱山の白っぽい山肌には土煙がもうもうと上がっている。塔ノ尾は賑わっていたがここまで足を延ばす人は少ない。臼杵湾にあるのに津久見島という通称おにぎり島を望み、キツツキが奏でる乾いた音を聞きながら林道経由の山庵寺で昼をとる。明暦三年（一六五七）高僧賢巌禅師が開山した寺で鐘をつき下山の途へ。登りは二時間ほどかけたが下りは稀な体験を話しながら四五分で登山口に戻った。

帰路、臼杵城址に鎮まる臼杵護国神社に参りあらためて鎮南山を見上げる。石鎚大神のご神慮や氏神さまのご縁に恵まれた幸先の良い山歩きとなったことを喜んだ。

ふるさとの山に向かひて　言ふことなし
ふるさとの山は　ありがたきかな

石川啄木

令和三年で私も満四十八歳になり、護國神社に奉職して二十年の節目を迎えます。五十路を目前に、息子の今後の養育や老後の生活設計等の課題を抱えており、私自身もこのようなことも考なければならない年齢になったのだとつくづく感じる様になりました。

そんな中、特に体力維持には心を配り努力を重ねております。と言うのも、神職の仕事柄、立ち居や階段の上り下りが多いため足腰への負担が大きい事と、崩れ行く自身の体型に大きな危機感を抱いたからです。顔面は除外しても「カッコ良くなりましたね！」と一言いわれたいが故に、三年ほど前からジョギングを始めました。ウォーキング歴は約十五年ほどありましたが、ナイキから目にも鮮やか羽の様に走れる評判のランニングシューズが発売された事に触発され、初心者向けのランニングシューズを衝動買いしたのを転機に断然ランニング魂の闘志に火が付きました。

まずは自宅周辺の公園をジョギングし始めたのですが、走った夜には妻や息子に足をマッサージしてもらいつつ、サロンパスを貼りながら日に二～三キロを目標に取りあえず走ることをこなしておりました。それが最近では、一キロを六分ペースで五キロ～六キロを走れるようになりました。走り始めの一キロは足の重たさは感じますが、二キロからは自分なりの良いペースで気持ちよく走ることができ、後半の五キロからはランナーズハイという走るのがうれしいといった高揚した気持ちに至り、その日の目標を達成すると本当に充実感に満たされます。ツライ、シンドイ、キツイという思いでは何も進みませんが、自分の思いを少しかえるだけでチャレンジする気持ちを生み、さらに達成するという喜びが得られるのです。そういうものが一つでもあれば、大袈裟かもしれませんがこれからの人生の励みになります。

何事も自分自身の思いや行動を少し変えることで、幸せで楽しいと思える自分自身に出会えるのです。自分自身を幸せにできるのはつまり自分自身なのだと思います。その心の灯火を消すことなく今後も明るく楽しく、また時として厳しく課題に挑み、上手に自分の体とも付き合っていきたいと思っております。